幼児の身体意識に関する研究（Ⅲ）

松永 恵子* 松永 淳一**

A Study on the Development of Body-Awareness in Preschoolchildren (III)

Keiko Matsunaga*, Jyunichi Matsunaga**

Abstract

This is a study on the nurture environment and body-awareness in 3-year old children. Results were as follows.

1) The nurture environment showed no significant influence on the awareness of body parts in children.

2) All the subjects drew the body image B (the second picture) larger in size than the body image A (the first one). The body image drawn by the home nursed children were larger in size than those by the nursery subjects.

The drawing points were higher in the body image B than in image the A of both home nursed and nursery subjects. The 24-hour nursery subjects, however, did not show such a definite tendency.

The development of drawing ability was not significantly influenced by nurture environment. Until the age of 3 and a half they were not able to draw hands and feet. The 24-hour nursery subjects mostly could not draw body parts even after the age of 3 and a half.

緒言

近年、少子化や核家族化の進行、女性の社会進出の増加、都市化による生活環境の変化、価値観や生活様式の多様化等により、子どもを取り巻く環境は大きく変化している。

このような状況のなかで、1994年に文部、厚生、労働、建設各大臣の合意のもとに「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」¹⁶⁾が策定された。

策定の具体化の一環として、近年の保育需要の多様化に対応するため、低年齢児保育の促進や、午後6時以降の延長保育が行われ、乳幼児の心身の発達に様々な形で影響を及ぼすのではないかと推察される。また、核家族化、少子化傾向は乳幼児の早期教育ブームを生み胎児教育まで出現した。

ところでFrostig²⁾は「身体意識とは自分自身を環境から独立した人として意識することであり、また環境と相互作用をもちながらそれを支配する人として意識することである」と定義している。この身体意識は身体像（感じられるままの体）、身体概念（体の事実に関する知識）、身体図式（骨格の各部分を自動的に調節すること。筋肉を緊張させたり弛緩させたりすること）によって構成され、心身の正常な発達のために基本的なものである。しかし、教育を機械化して多くの技能を強制的に反復させたりすると、自己意識や他者の意識を発達させることが無視されるようになると警告している。

さて、身体意識の構成要素のうち身体概念の発達過程は、身体部位の認知や動作語の認知によって推察できるが研究事例¹¹⁾は少ない。身体像の発達過程は身体

* 長崎県立女子短期大学 Nagasaki Prefectural Women's Junior College, 1-4-1, Narutaki, Nagasaki-shi, 850-0011, Japan
** 長崎大学 Nagasaki University, 1-14, Bunkyo-machi, Nagasaki-shi, 852-8131, Japan

画によって推察することができる。身体画に類似したものに人物画¹⁸⁾があり、両者とも全身を描くことが同一条件で、人物画の描画面積は身体画の描画面積と同様の意味をもつと考えられる。従来から人物画は心理テスト法⁵⁾として採用され、大きい像は力への願いを、小さい像は劣等感や退行を表すといわれているが、保育環境による発達の特徴に関する研究事例は少ない¹²⁾。

以上、幼児の身体意識に関する研究は個々には行われているが、総合的な立場からは研究されていない。そこで本研究では、3歳児の身体意識が保育環境によってどのような特徴がみられるか明らかにし、基本的な生活の場や運動遊びにおける保育者の言語教示のあり方について追究することを目的とした。

研究方法

調査対象は表1のとおり3歳児の通常保育所児236名、家庭養育児261名、早期学習塾児80名、24時間保育所児24名 計601名であった。

なお、早期学習塾（以下学習塾）とは、1歳から就学までを対象とした塾で、指導の中心は受験対策である。24時間保育所とは、誕生1ヶ月から就学までを対象とした保育所で、時間制、月極制、会員制、一週間制の入所システムがあり、昼間部午前7時～午後6時30分、夜間部午後5時～午前2時、昼夜部午前7時～午前2時まで受け入れている。保育は漢字遊び、俳句遊び、英語遊び及び幼児能力開発協会の理論を取り入れている。家庭養育児は4月に幼稚園に入園して1ヶ月余りの園児である。通常保育所（以下保育所）とは、0歳から就学までを対象とした保育所であり、午前8時～午後6時まで開所している保育所である。

調査期間は1994年8月～1996年3月で、以下の身体意識調査を実施した。

1. 体の事実に関する知識の発達

体の事実に関する知識の発達を検討するために、身体部位認知調査と動作語認知調査を行った。但し、調査の途中で言語教示に反応を示さなかった場合は対象から除外した。

1) 身体部位認知の調査

一人ずつ面接して立位開眼の姿勢で行った。「あなたの頭はどこですか。手で触ってください」と教示し、教示できた部位を1点として数量化し、誤反応の部位も記録した。調査した部位は目、口、耳、鼻、頭、首、肩、胸、腹、腰、尻、腕、肘、手首、手、脚（足）、膝、足首、踵、爪先、背中の21部位であった。

2) 動作語認知の調査

身体部位認知の調査直後に、手を振る、腰を曲げる、膝を曲げる、腕を曲げる、腕を振るの5種類の動作について実施し、誤反応の仕方も記録した。今回は腰を曲げるは前に曲げる、腕を振るは肩から振ることができたものを合格とした。

2. 体のイメージに関する発達

体のイメージ形成の発達を把握するために身体画を採用した。身体画Aは「お風呂に入るとき裸になるでしょう。あなたの裸の絵を頭から足までみんな描いてください。」と教示してB4版の画用紙にサインペンで描かせた。身体画Bは身体画Aを回収した直後に「先生の体をみてください。ここは頭です。目や口があって首があります。肩から腕がでていて手には指が5本あります。あなたの体をみんな描いてください。」と情報を提示して描かせた。

身体画の描画得点は描画部位を頭、首、胸、腕、手、

表1 対象児

		家 庭	保育所	学習塾	24時間保育所	計十
3.0～3.5歳	男児	4 5	6 6	2 2	8	1 4 1
	女児	3 5	5 3	1 8	6	1 1 2
3.6～3.11歳	男児	9 0	6 7	2 5	7	1 8 9
	女児	9 1	5 0	1 5	3	1 5 9
計十		2 6 1	2 3 6	8 0	2 4	6 0 1

表2 身体部位認知の発達（％）

	3. 0 ～ 3. 5歳							
	家庭	男 保育所	児 学習塾	24じかん 保育所	家庭	女 保育所	児 学習塾	24じかん 保育所
目	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
口	100.0	98.5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
耳	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	98.1	100.0	83.3
鼻	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	96.1	100.0	83.3
頭	100.0	97.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
首	86.7	77.3	95.5	87.5	88.6	94.3	94.4	83.3
肩	62.2	62.1	68.2	62.5	74.3	81.1	55.6	50.0
胸	8.9	10.0	9.1	0.0	14.3	11.3	5.6	16.7
腹	15.6	21.2	4.6	25.0	17.1	13.2	0.0	33.3
腰	17.8	25.8	31.8	25.0	14.3	32.1	22.2	33.3
尻	91.1	80.3	72.7	87.5	97.1	88.7	83.3	83.3
腕	17.8	7.6	18.2	0.0	8.6	30.2	22.2	33.3
肘	4.4	9.1	4.6	0.0	0.0	15.1	16.7	16.7
手首	2.2	1.5	0.0	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0
手	100.0	95.5	100.0	100.0	97.1	100.0	94.4	100.0
足(脚)	95.6	95.5	95.5	100.0	100.0	96.2	100.0	100.0
膝	55.6	27.3	50.0	25.0	45.7	39.6	44.4	83.3
足首	2.2	1.5	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0
踵	2.2	3.0	0.0	0.0	0.0	1.9	5.6	0.0
爪先	0.0	4.6	9.1	0.0	0.0	3.8	5.6	0.0
背中	71.1	75.8	95.5	87.5	94.3	90.6	88.9	83.3
N	45	65	22	8	35	53	18	6
M	11.2	10.8	11.5	10.8	11.5	11.7	11.5	11.2
SD	1.69	1.87	1.88	1.48	1.52	1.71	2.03	1.95
F-検定		n. s				n. s		

	3. 6 ～ 3. 11歳							
	家庭	男 保育所	児 学習塾	24じかん 保育所	家庭	女 保育所	児 学習塾	24じかん 保育所
目	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
口	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
耳	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
鼻	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
頭	97.8	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
首	91.1	88.1	92.0	85.7	95.6	98.0	100.0	66.7
肩	71.1	74.6	72.0	57.1	90.1	84.0	100.0	66.7
胸	11.1	16.4	20.0	14.3	14.3	22.0	46.7	33.3
腹	13.3	35.8	24.0	14.3	16.5	40.0	26.7	0.0
腰	24.4	44.8	40.0	14.3	34.1	56.0	33.3	33.3
尻	96.7	92.5	84.0	71.4	98.9	98.0	93.3	100.0
腕	27.8	22.4	44.0	0.0	31.9	44.0	40.0	33.3
肘	13.3	16.4	32.0	14.3	15.4	36.0	33.3	33.3
手首	2.2	7.5	8.0	0.0	1.1	6.0	0.0	33.3
手	100.0	98.5	92.0	100.0	97.8	96.0	100.0	100.0
足(脚)	100.0	100.0	96.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
膝	56.7	40.3	52.0	57.1	73.6	58.0	80.0	100.0
足首	2.2	3.0	8.0	0.0	2.2	4.0	6.7	0.0
踵	5.6	1.5	20.0	0.0	3.3	10.0	6.7	33.3
爪先	5.6	6.0	12.0	14.3	3.3	10.0	13.3	33.3
背中	85.6	88.1	80.0	57.1	90.0	96.0	93.3	100.0
N	90	67	25	7	91	50	15	3
M	11.9	12.3	12.5	10.4	12.7	13.2	13.7	13.0
SD	2.01	2.30	2.55	1.99	1.59	2.02	2.21	2.94
F-検定		n. s				n. s		

脚、足の7部位に分類し描けた部位を1点として数量化した。描画率は各部位毎に描けた人数を性別の総人数で除したものであり、描画面積は縦と横の最長を乗じたものである。事例の身体画は全てB4版の画用紙を等率に縮小したものを使用した。

結果

1. 体の事実に関する知識

1) 身体部位認知の発達

表2は対象児の身体部位認知の発達であり、目、口、耳、鼻、頭の首より上部では24時間保育所女児の耳と鼻を除いて100%近く認知していた。肩、胸、腹、腰、尻、背中、の胴体部位では、男女とも尻と背中が良く認知されていた。しかし、胸と腹に保育環境の差がみられ、特に腹は3歳前半女児では学習塾児0%、保育所児33%の認知であったが、おなかと換言すると両者ともに指示することができた。身体を中心部位である腰は運動の際に保育者が「腰に手をあてて」等を指示したりするが、3歳後半で保育所女児56%、24時間保育所男児14.3%と認知に格差がみられた。

腕、肘、手首、手の上肢では、手は100%近く認知していたが、手首、肘等の関節の部位の認知は先行例¹⁰⁾より低下していた。また、腕は男女とも保育環境による差がみられ3歳後半の男児で24時間保育所児0%、学習塾児44%であった。松永¹⁴⁾が1983年に調査した結果では、腕は保育所児では3歳児で14%であったが、今回の調査では24時間保育所児男児は0%であった。脚(足)、膝、足首、踵、爪先の下肢では、足を除いて先行例¹²⁾同様認知率が低かった。

各個人の身体部位認知総得点の平均は、21部位中3歳前半では11~12点、3歳後半では10~14点で、各保育環境における平均の差の検定では有意な差は認められなかった。また、性差についてはどの保育環境でも女児の方が得点が高く、特に家庭養育児の3歳後半と保育所児に有意な差がみられた。3歳前半と3歳後半の半年間の発達差は男児より女児の方が有意に高かった。また3歳前半男児で身体部位の誤反応が対象園の2カ所以上で出現した部位を列記すると、胸は首、腹。腹は首、背中、耳。背中肩、腹。腰は肩、脇。腕は

首、手、顎。肘は肩、手首、手、膝。手首は首。踵は肩、首を指した。特に腹、腕、肘に誤反応が多く、首や肩を指示する例が多かった。

表3 動作語の誤反応例(3歳前半男児)

誤 反 応	家 庭	保 育 所	学 習 塾	24時間保育
手 を 振 る	手をたたく	2	1	
	手を出す	6	6	2
	肩から振る	1		
	手を上げる	1	1	1
	肩をまわす	1		
	肘を曲げる			1
	手をにぎる		1	
	手首をまわす		4	1
	手首を曲げる		1	
	手首をひねる		1	
腰 を 曲 げ る	左に曲げる	1		
	後に反る	3	2	
	膝を曲げる	2	2	1
	腰をびんと伸ばす	1	1	
	腕を曲げる	1		
	手を上げる		4	
	肘を曲げる		1	
	まわる		1	
	身体をひねる		1	
	後向き			1
	首を曲げる			1

2) 動作語認知の発達

表3は3歳前半男子の動作語誤反応の一部であり、手を振るという基本的な動作でも、手を出すなど10種類の誤反応が認められた。腰を曲げるでは後ろに反るなど11種類の反応、膝を曲げるでは4種類、腕を振るでは手を振るなど14種類の反応が認められた。

図1~図2は動作語認知の結果である。手を振るでは男児では3歳後半でも24時間保育所児が動作することができなかった。女児では学習塾を除いて発達曲線が類似していた。膝を曲げるでは男児では24時間保育所児が動作することができなかった。女児では3歳前半では学習塾児、3歳後半では24時間保育所児が動作することができなかった。腰を曲げることは3歳児にとって難しい課題であった。膝を曲げるでは男児では学習塾児の認知が良好であった。女児では半年間の発達がそれぞれ顕著であった。腕を曲げるでは男児では保育所児と24時間保育所児が動作をすることができなかった。腕を振るでは肩から腕を振ることができたのは、3歳後半男児で3~4%の認知率であった。

図1 動作語認知の発達（男児）

図2 動作語認知の発達（女児）

2. 体のイメージに関する発達

1) 身体画の実態

体のイメージ形成の発達を検討するために身体画が選ばれた。図3、4はその事例であり、言語教示の仕方によって幼児の描く身体画がどのように変化するかみたものである。

事例のように飛躍的に描画部位が明確になり、身体画も大きくなった例もあれば、スクリブルやシンボルのような例もみられた。

2) 身体画の描画面積、描画得点及び描画率

①描画面積

表4は身体画の描画面積である。今回の身体画はKellog, R⁷⁾の「人間」画を参考にしたので、描画面積は画用紙にスクリブルでも描いてあれば面積として算

出した。B4版の1026cm²の画用紙に描かれた身体画Aの面積は、3歳後半の男児を例にとると、家庭養育児32.6%、保育所児25.4%、学習塾児30.2%、24時間保育所児11.1%であった。

描画面積の保育環境別の比較では、身体画Aでは3歳後半男児で5%水準で有意な差がみられ、家庭養育児の334cm²の大きさに対して24時間保育所児は113.6cm²で1/3の大きさであった。身体画Bでは3歳後半女児で家庭養育児の描画面積が5%水準で有意な差がみられ、学習塾児365cm²に対して24時間保育所児は145cm²の大きさであった。男女の比較では、家庭養育児の身体画Aの3歳後半で男児が1%水準で有意に大きい以外は男女差は見られなかった。

保育環境別の身体画Aと身体画Bの描画面積の比

較では、一部の年齢を除いて、身体画Bが大きく、先行例¹¹⁾と一致した。しかし、家庭養育児の3歳後半女兒が5%水準で身体画B.が大きい以外は、有意な差は認められなかった。

B4版の画用紙の約1/10の大きさである100cm²以下の絵は、身体画Aで保育所児は、236名中65名(27.5%)、家庭養育児261名中36名(15.6%)、学習塾児80名中13名(16.0%)、24時間保育所児24名中9名(37.5%)であった。

②描画得点

表5は身体画の描画得点である。描画得点は○のように閉じられた形から絵になる³⁾といわれているので、スクリブルのように閉じられていない形は得点化せず、○のように閉じられていれば頭として得点化した。その結果、身体画Aの得点は1～2点、身体画Bの得点は1～3点であった。

保育環境別の比較では、身体画Aでは男児で5%水準で有意な差がみられ、学習塾児の得点が高く、24時間保育所児は3歳後半で1点であった。身体画Bでは、3歳後半女兒で1%水準で有意な差がみられ、家庭養育児の得点が高く、24時間保育所児が1点台であった。また、各保育環境による身体画Aと身体画Bの描画得点の比較では、一部の年齢を除いて身体画Bが得点が高かった。特に家庭養育児が3歳前半男児と3歳後半の女兒で1%水準で有意に高かった。保育所児では女兒が3歳前半、後半ともに身体画Bが1%水準で有意に高かった。学習塾児で3歳前半女兒が5%水準で身体画Bの得点が高かった。

③描画率

表6は身体画の描画率である。描画率は全般に男児より女兒が良好であった。また、家庭養育児の3歳前半の男女は、身体画Aより身体画Bの描画率が高いが、学習塾児の3歳後半男児では、身体画Bの5部位が低かった。

3歳前半の身体画Aでは、学習塾の女兒と24時間保育所の男児に0%が多く、身体に関するイメージ形成が未発達であった。3歳後半でも24時間保育所児に0%が多く、首や胴、腕、手、脚、足などの身体イメージは形成されていなかった。以上、身体画について検

討したが、3歳児では身体のイメージ形成に個人差や保育境による相違がみられた。

考察

1. 体の事実に関する知識

幼児がある環境で、どのように行動するかは環境と自分との関係を如何に認知するかという自己概念⁹⁾に規定されている。誕生後の乳児は自分と環境を区別することはできないが、次第に自分の体をなめたり、たたいたりする自己刺激運動を通して自分の体と外界を分化していく。この身体的自己は、その後2～3歳からことばによる身体部位が確認できるようになり、意識される部位は前方から後方に移行していく傾向がある¹⁰⁾。

運動遊びの言語指示では身体部位の名称を用いることが多い。幼児が身体部位をどのように認識しているかが理解されないと、言語指示に的確さが欠くと考えられる。そこで、保育環境の相違が幼児の体に関する事実の知識の発達に影響を及ぼしているか調査した。その結果、身体部位認知の総得点の平均は、21部位中10～14点で、総体的に3歳後半の女兒を除いて、24時間保育所児の認知は低かったが、有意な差は認められなかった。

また、男児より女兒が身体部位の認知は良好であった。これは幼児期では男児は女兒に比べて発達が全般的に遅く、言語面で相対的な遅れが目立つのとは一致している²¹⁾。この発達の遅速を規定する要因は明らかではないが、一般的な成熟速度の違いによるものと解釈され、身体意識の男女差も同様と考えられる。

また、津守¹⁹⁾によれば、話しことばの発生段階の15ヶ月で、目、耳、口、その他身に付けているものをたずねるとさすという。そして「あれをちょうだい」というかわりに、「棚の上の黄色い花の脇にあるコップをもってきてちょうだい」のように、言語環境を豊富にしていけば、特別にことばを教える必要はなく、子どもは自分から言語を習得していくものであると述べている。

たしかに子どもに対する大人の言語的な働きかけと、子どもの認知発達との間には、密接な関係がある

表4 身体画の描画面積 (cm²)

			家 庭			保 育 所		
			N	M	SD	N	M	SD
身体画A	3.0～3.5	男児	37	315.0	240.2	53	300.8	219.8
		女児	31	263.7	178.8	46	270.1	230.9
	3.6～3.11	男児	78	334.7	226.4	61	260.7	201.3
		女児	88	251.7	185.5	44	203.8	147.3
身体画B	3.0～3.5	男児	37	346.0	210.4	57	344.9	234.7
		女児	32	317.4	218.2	46	282.9	213.6
	3.6～3.11	男児	78	372.3	201.0	57	311.7	223.6
		女児	86	311.3	199.2	44	229.9	197.8

			学 習 塾			24時間保育所			F-検定
			N	M	SD	N	M	SD	
身体画A	3.0～3.5	男児	16	287.1	214.4	7	482.6	337.3	n. s
		女児	15	274.3	216.5	5	242.1	231.0	n. s
	3.6～3.11	男児	20	309.0	221.8	6	113.6	154.5	P<0.05
		女児	13	258.9	160.2	3	126.4	61.5	n. s
身体画B	3.0～3.5	男児	11	327.4	233.1	8	431.8	226.4	n. s
		女児	12	256.1	232.0	5	325.7	283.8	n. s
	3.6～3.11	男児	15	358.4	257.6	5	254.1	272.1	n. s
		女児	10	365.4	151.9	3	145.2	71.6	P<0.05

表5 身体画の描画得点

			家 庭			保 育 所		
			N	M	SD	N	M	SD
身体画A	3.0～3.5	男児	16	1.4	0.78	35	1.5	0.84
		女児	17	1.7	1.07	39	1.8	1.25
	3.6～3.11	男児	51	2.8	1.60	48	2.3	1.31
		女児	70	2.3	1.52	41	1.8	1.08
身体画B	3.0～3.5	男児	15	2.4	1.45	45	1.8	0.97
		女児	24	2.5	1.73	40	2.5	1.48
	3.6～3.11	男児	48	2.9	1.51	45	2.8	1.55
		女児	79	3.4	1.75	44	2.4	1.29

			学 習 塾			24時間保育所			F-検定
			N	M	SD	N	M	SD	
身体画A	3.0～3.5	男児	16	2.4	1.62	4	1.8	0.83	P<0.05
		女児	15	1.3	0.47	4	2.3	2.65	n. s
	3.6～3.11	男児	20	2.9	1.37	6	1.0	0.0	P<0.05
		女児	13	2.6	1.27	3	2.0	0.81	n. s
身体画B	3.0～3.5	男児	11	2.1	1.50	5	1.4	0.80	n. s
		女児	12	2.1	1.26	4	2.8	2.04	n. s
	3.6～3.11	男児	15	3.1	1.20	4	1.8	0.82	n. s
		女児	10	2.8	0.74	3	1.7	0.94	P<0.01

表 6 身体画の描画率 (%)

描 画 部 位	身 体 面	3. 0 ~ 3. 5 歳							
		家庭		保育所		学習塾		24時間保育所	
		男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
頭	A	33.3	45.7	55.6	79.6	80.0	77.8	50.0	80.0
	B	33.3	65.7	69.8	81.6	78.4	80.0	50.0	80.0
首	A	2.2	5.7	0	0	0	0	0	0
	B	0.0	8.6	0	2.0	7.1	0	0	0
胴	A	6.7	11.1	4.8	24.5	20.0	22.2	0	20.0
	B	15.7	11.4	7.9	22.5	14.3	20.0	0	20.0
腕	A	2.2	2.9	6.4	10.2	25.0	0	12.5	20.0
	B	8.9	14.3	19.1	30.6	21.4	20.0	12.5	40.0
手	A	0.0	0.0	3.2	4.1	5.0	0	0	20.0
	B	4.4	8.6	3.2	10.2	0	6.7	0	20.0
脚	A	6.7	11.4	14.3	18.4	40.0	11.1	25.0	20.0
	B	11.1	28.6	28.6	40.8	35.7	26.7	12.5	40.0
足	A	0.0	2.9	1.6	4.1	0	0	0	20.0
	B	6.7	14.3	1.6	12.2	7.1	13.3	0	20.0

描 画 部 位	身 体 面	3. 6 ~ 3. 11 歳							
		家庭		保育所		学習塾		24時間保育所	
		男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
頭	A	55.5	74.7	75.4	85.1	86.9	92.9	85.7	100.0
	B	51.5	86.8	72.6	93.6	79.0	90.0	57.1	100.0
首	A	4.4	8.8	3.2	2.1	8.7	0	0	0
	B	6.7	17.6	8.1	4.3	0	0	0	0
胴	A	20.0	37.4	32.3	21.3	56.5	42.9	0	33.3
	B	18.9	49.5	32.3	34.0	36.8	54.6	14.3	33.3
腕	A	20.0	17.6	14.5	21.3	17.4	14.3	0	33.3
	B	20.0	42.9	29.1	27.7	42.1	27.3	14.3	0
手	A	10.0	8.8	9.7	2.1	17.4	7.1	0	0
	B	11.1	27.5	6.5	6.4	10.5	9.1	0	0
脚	A	30.0	23.1	29.0	25.5	47.8	64.3	0	33.3
	B	32.2	47.3	43.6	40.4	73.7	54.6	14.9	33.3
足	A	17.8	6.6	6.0	0	17.4	21.4	0	0
	B	14.4	27.5	8.1	14.9	5.3	18.2	0	0

図3 身体画の事例 男児

図4 身体画の事例 女児

といわれている。しかし、学習塾などでは文字教育など早期教育が盛んに行われているが、子どもに対する言語的働きかけが一方的な形でなされる場合、そこに如何に知的な内容が含まれていても、それは効果的ではないという報告¹⁵⁾もみられる。

動作語は、日常良く運動場面で教示する、手を振る、腰を曲げる、膝を曲げる、腕を曲げる、腕を振るについて調査した。一人ずつ面接した結果、表3の事例のように手を振るという基本的な動作でも、手をたたく、手を出す、手を上げる、肩を回す、肘を曲げる、手を握る、手首を回す、手首を曲げる、手首をひねる等、多種多様な反応を示した。

Flostig²⁾は、正常な心理的・身体的発達のためには、身体意識の形成が基本であること。そのためのムーブメント教育が最も有効で、身体概念の具体的な方法として「胸に触りなさい」、「右手で足首に触りなさい」など、身体部位の指示と動作の言語化を組織的に図ることを強調している。

保育所は日々保護者の委託を受けて、保育に欠ける乳幼児を保育することを目的にしており、乳幼児が生活の大半を過ごす所である。運動学習とそれに用いられる言語教示を周到に用意して、ゆとりある保育を展開すれば、身体意識に関する保育効果も期待される。

2. 体のイメージ形成

幼児の描画における人間像の発達過程は、人に対する概念の発達過程でもある。幼児は自分のイメージでのびのびと表現する機会が多いと、事例のように3～4歳頃には、頭部人間像や頭足人間像を描けるようになる²⁰⁾。そこで今回は子どもの身体像の発達レベルを把握するために、身体画について検討した。

その結果、先行例¹⁸⁾のように3歳児はスクリブルから比較的完成に近い人間像まで描く個人差と頭部人間像や頭足人間像を描く共通性がみられた。

これは、8、9歳以降にみられる「見えるように」描く視覚リアルズムに対して、幼児は「知っていること」を描く知的リアルズムであり、表現法に根本的な違いがみられるためである¹⁷⁾。幼児がこのような表現法をする理由として、描画の対象への欠如や描画技術の未熟さが挙げられている²²⁾。

本調査では描画得点は一部の対象児を除いて身体画Aより身体画Bの方が高得点であったが、学習塾児では男女とも、どの年齢でも身体画として判断できないスクリブルのような絵が増加した。これは、上記の理由に加え他の対象児より2回目の身体画を描く集中力持続の欠如が考えられる。

また人物描画法⁴⁾では、人的機能の知的側面及び情意的側面を評価しうる方法として発展してきた。近年、描かれた人物像と用紙の関係、例えば人物像の用紙内に占める位置や大きさといった形態心理学的な認知が無視できない傾向にある。

本調査の身体画Aと身体画Bの描画面積の比較では、身体画Bが一部の年齢を除いて大きかった。これは先行例¹⁾同様、具体的な身体部位の情報提示によって、体の事実に関する知識を得て体のイメージが明確になり、不安を解消して身体画を描ける幼児が増加し、描画面積が大きくなったと推察された。

いずれにしても、一回の情報提示によって一部の対象児を除いて、身体画Aより身体画Bの描画面積が大きくなり、描画得点や描画率が高得点化したことは、3歳児における身体部位に関する言語教示の有効性を示唆していた。

また、身体像は個人的特徴、自分自身について感じていること、他人が自分をどうみているかという対人知覚などによって左右される。特に自分自身を弱小で無意味なものと感じる為に、自分を非常に小さく描く場合がある⁵⁾。

B4版画用紙の約1/10の大きさである100cm²以下の絵は、家庭養育児で261名中36（15.6%）、保育所児236名中65名（27.5%）、学習塾児80名中13名（16.2%）、24時間保育所児24名中9名（37.5%）であった。

高橋¹⁸⁾は身体画の描画面積は被験者と環境との関係を表し、自尊心、自己拡大の欲求、活動性、感情状態を示すとして、画用紙の1/3以内の描画面積を小さい絵と評価している。

この小さい面積は低い自尊心、自己抑制、引きこもり、無力感、不適切感、劣等感、抑鬱気分、依存性、退行した状態を表す²²⁾としている。特に保育所児では27.5%、24時間保育所児では37.5%であった。幼児に

って絵を描くことは、内面の思考や感情の表現であり、生活そのものを反映させた心の記録でもあるので、身体画に表れた心の表現を受け止め、保育を見直す手がかりにもなると推察された。

さらに、着衣の人物を描く機会は、日々の保育活動や家庭において多くあるが、裸の身体画を描くことによって、身体部位の認知に留まらず、体の構造やその働きを理解する動機づけにもなる。

また、身体像を育てるためのムーブメント教育としては、筋の緊張や弛緩を繰り返す運動、触感覚刺激、筋肉運動知覚刺激¹⁰⁾などが考えられる。トンネル、マット、フープ、ビーンバッグなどの遊具を用いて自由に遊べる保育環境が身体像形成のための刺激として有効であり、心理的に不安感を抱いている幼児の心を解放することにもなる。

身体意識の発達基礎は、母子関係の絆を形成する生得的メカニズムである原始反射に起源をもち、さらに胎児の身体感覚にまでさかのぼるかも知れない⁶⁾といわれている。

身体意識の発達と発生は、純粋に個体発生的な図式だけでは説明できない。常に他者の存在、養育者を中心とする他者とのコミュニケーションにおける「対人的同期性」の中で身体意識は発達し変容する⁶⁾ので、保育所における乳児保育は重要な意味をもつと考えられる。

要約

3歳児を対象に保育環境が幼児の身体意識に影響を及ぼしているか検討した。その結果以下のことが明らかになった。

- 1) 体の事実に関する知識のうち、身体部位の認知については保育環境による相違はみられなかった。動作語の認知については、男児で24時間営業保育所児が低い傾向を示した。
- 2) 体のイメージ形成の発達のうち、描画面積においては全体的に無指示で裸の絵を描かせた(身体画A)時より、身体部位の情報呈示後描かせた(身体画B)の方が大きかった。また、家庭養育児が通常保育所児より大きい傾向を示した。描画得点においては家庭養

育児と通常保育所児では、身体画Aより身体画Bの方が高得点であったが、24時間営業保育所児では一定の傾向は認められなかった。

描画率は保育環境に関係なく、3歳前半では首や身体末端部の手足は描けない傾向を示した。3歳後半では24時間営業保育所児で描けない部位が多かった。

文献

- 1) Fisyer (1973), からだの意識, 誠信書房, 162-191
- 2) Frostig (1978), 肥田野直訳, ムーブメント教育, 日本文化科学社, 12
- 3) 林 建造 (1996), 異文化としての幼児画—あなたへのメッセージの読みとり方—, フレーベル館, 50
- 4) 日比裕泰 (1994), 人物描画法—絵にみる知能と性格—, ナカニシヤ出版, 7-8
- 5) 伊藤隆二 (1981), 心理テスト法入門, 日本文化科学社, 80-83
- 6) 春日 喬 (1990), 身体意識の発達とその障害, 体育の科学40, 261-268
- 7) Kellogg, R (1976), 児童画の発達過程, 黎明書房, 115
- 8) 厚生省児童家庭局 (1990), 保育所保育指針, 日本保育協会, 7-69
- 9) 近藤充夫 (1989), 保育内容「健康」, 建帛社, 46
- 10) 小林芳文 (1988), 身体意識ムーブメント, コレール社, 14
- 11) 松永恵子 (1992), 幼児の身体意識の発達, 保母養成研究10, 全国社会福祉協議会, 61-70
- 12) 松永恵子 (1991), 保育形態が幼児の身体意識に及ぼす影響, 長崎県立女子短期大学紀要39, 164
- 13) 松永恵子 (1994), 幼児の身体意識と保育者のかわり, 保母養成研究12, 全国社会福祉協議会, 27-36
- 14) 松永恵子 (1983), 身体意識と言語指示の仕方による立幅跳の記録の変化, 長崎県立女子短期大学紀要31, 59-70
- 15) 三宅和夫 (1976), 幼児心理学, 共立出版,

109-116

～3歳まで，日本文化科学社，61-125

16) 文部・厚生・労働・建設大臣（1994），今後の子育て支援のための施策の基本的方向についてエンゼルプラン，通達

17) 須賀哲夫（1979），子どもの絵 児童画研究の源流，金子書房，

18) 高橋雅春（1991），人物画テスト，文教書院，9

19) 津守 真（1975），乳幼児の精神発達診断法 0

20) 鳥居照美（1989），子どもの絵の見方・育て方，大月書店，102-103

21) 若井邦夫（1979），子どもの発達と教育4，幼年期，岩波書店，136

22) 渡部景一（1982），想像による絵画表現，開隆堂，45-49

（1998年3月24日受付，5月6日受理）